事業名	連携先自治体等	大学担当部局	実施期間・備考
津波災害と持続可能なまちづくり研究会	徳島県危機管理部、徳島県南海地震防災課、とくしまゼロ作戦推進室、徳島大学環境防災研究センター	工学部建設工学科（平成26年度～）	平成24～平成25
薬用植物の栽培に関する研究会	徳島県（農林水産総合技術支援センター）	大学院研究部生薬学分野・薬学部薬用植物園	平成24.11～
地域力としての次世代スーパーサイエンティスト育成事業―大学生とのコラボで育成する自律的課題解決能力―	徳島県教育委員会	地域創生センター	平成24.6～
「農」と「食」の再生－農商工連携、6次産業化ビジネスモデル研究－「薬用植物関連産業の振興」に関する基礎調査	徳島県（地域振興総局、徳島県立農業水産総合技術支援センター農業大学校、徳島県立総合大学校）、美馬市	大学院医歯薬学研究部生薬学分野・薬学部薬用植物園	平成24.6～
徳島ＩＣＴ研究協議会	徳島県企画総務部、徳島商工会議所、徳島県商工会連合会、徳島県経済同友会、鳴門教育大学 ほか　県内公的機関、大学等	情報化推進センター	平成22.9～
出前科学実験教室「やっToku、なっToku、Dai実験」	吉野川市アメニティセンター（吉野川市教育委員会）、勝浦町教育委員会（勝浦町教育委員会）、佐那河内村教育委員会、三好市教育委員会	大学院ソシオテクノサイエンス研究部総合技術センター	平成20～
阿南地域の竹林管理手法検討会	徳島県南部総合県民局、JA阿南、阿南市（南から届ける環づくり会議）	大学院ソシオテクノサイエンス研究部エコシステムデザイン部門（工学部建設工学科）、環境防災研究センター	平成20.6～
長期インターンシップ事業	徳島県立博物館、ニタコンサルタント など公的機関、企業等	長期インターンシップ委員会（先端技術科学教育部）	平成18.10～
南から届ける環づくり会議	徳島県南部総合県民局、南から届ける環づくり会議	環境防災研究センター	平成18.7～
地域産業人材育成講座	徳島県立工業技術センター、徳島県東部保健福祉局徳島保健所、西精工株式会社、大阪市立大学、首都大学東京、高崎経済大学、流通科学大学、（株）パッケージ松浦、光食品（株）、富士ファニチア、花王（株）	研究支援・産官学連携センター	平成17～
徳島ビジネスチャレンジメッセ	（社）徳島ニュービジネス協議会	産学官連携推進部研究支援・産官学連携センター	平成15～
インターンシップ事業	徳島市役所ほかの官公庁、徳島新聞社ほかの企業等	インターンシップ実施検討会議、就職支援センター連絡会議、学務部学生生活支援課	平成12.6～

新聞記事に見る
徳島大学の地域連携事業

徳大がSO 神山に開設

県内5カ所目

徳島大は30日、神山町にSO「神山学舎」を開設した。那賀、上勝、美波3町と三好市に続き県内5カ所目。地方創生の先進的な町づくりで知られる神山で、課題解決力を養い、創造性豊かな人材を育てる。

下分の神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックスに設けた神山学舎では、NPO法人グリーンバレーの大南信也理事長（徳島大客員教授）らによる講義やフィールドワークを不定期で実施する。過疎の現状を受け止め、起業家や子育て世帯を逆指名で移住させるといった神山の独創的な手法や理念を学んでもらう。

記念式典では、香川征学長や後藤正和神山町長、大南理事長、学生らが出席し、看板を除幕した。

早速、大南理事長が客員教授として講義し「『無理だ』『難しい』『できない』と言わないで、物事に前向きに取り組んでほしい」と力を込めた。（土井良典）

神山学舎の看板を除幕する関係者＝神山町下分の神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス

平成27年5月31日［徳島新聞］

徳島発 幸せここに

徳島新聞社・徳島大学連携事業

強い思いが成功の鍵

「衣料ブランド 群言堂」松場さん基調講演

三好でフォーラム

まちしごとファクトリー

徳島新聞社と徳島大学の連携プロジェクト・まちしごとファクトリーの第1弾フォーラム「『まちしごと』を創（つく）りだす～地域におけるスモールビジネスの可能性と実践」（明治大学、徳島県共催）が5日、三好市井川町の徳島大学にしあわ学舎であった。「こうありたいと思う気持ちが事業を成功させる」「宝は足元にある」など、地域で起業した先駆者からのメッセージに参加者は耳を傾けた。

（22面に関連記事）

石見銀山の町、島根県大田市大森町から衣類や雑貨のブランドを「群言堂」として発信している石見銀山生活文化研究所所長の松場登美さん(65)が基調講演した。

松場さんは1981年に夫の故郷、大森町に移住。以来、国産素材や国内生産にこだわった衣料ブランドを展開してきた。仕事への思いを「自分に与えられた天分を発揮し、人間としての成功を収めることが大切だ。利益ばかり求めていると道を見失う」と話し、非効率とされがちな田舎の暮らしを大事にしてきた姿勢を強調した。

事業を軌道に乗せるポイントとして「こうありたいと思う気持ちこそが事業を成功させるエネルギーになる」と指摘。そして「足元に宝はある。どんな小さなビジネスでも、思いを生活者に伝えていけば、やがて社会を変えることもできる。ぜひ徳島から大きな波を起こしてほしい」とエールを送った。

「宝は足元にある」とエールを込めて語る松場さん＝三好市の徳島大にしあわ学舎

フォーラムは東京の明治大にもサテライト会場を設け、テレビ会議で結んだ。徳島は150人、東京は30人が参加した。池田ケーブルネットワークやインターネット上の動画配信サイト・ユーストリームでも中継された。

プロジェクトはスモールビジネスの起業や空き家の利活用につなげ、地域の活性化を目指すのが目的で、8月下旬から勉強会と合宿形式のワークショップを展開する。詳細は「にしあわ学舎」のホームページなどで公開する。（門田誠）

＝15日付にフォーラム特集

平成27年7月6日［徳島新聞］

スモールビジネス 魅力は…

起業家ら熱く意見交換

徳島発 幸せここに。

徳島新聞社・徳島大学連携事業

三好のフォーラム

「出会いや交流 次の企画へ」

まちしごとファクトリー

仕事をつくり出して地域を変えよう。三好市井川町で5日、徳島新聞社と徳島大が開いたフォーラムは、起業を通じて地域活性化の担い手育成を目指すプロジェクト「まちしごとファクトリー」の第1弾。県内でカフェなど交流拠点の運営に乗り出している起業家らが登壇し、スモールビジネスを起こす楽しさや可能性をめぐって熱く意見を交わした。（1面参照）

パネリストは美馬市脇町のカフェ兼産直店「フナトト」店主の田村圭介さん、三好市池田町のバー「hesoSalon（ヘそサロン）」店主の西崎健人さん、同市の旧出合小学校でカフェ兼イベントスペース「ハレとケ」デザイン舎」を営む植本修子さんの3人。

3人は「始めた店が人の新たな出会いを生み、その交流が次の企画や動きにつながっている」「小さな事業だからこそじっくりと取り組める」「自分の時間を自分で決めて動くのは心地良い」とスモールビジネスの魅力を紹介した。

コメンテーターとして加わった石見銀山生活文化研究所（島根県）の松場登美さんは「一歩を踏み出さないと次の展開は見えてこない。経験上歩きながら考えるのがベストの方法じゃないか」と助言した。トーマツベンチャーサポート（東京）の松本雄大さんは「地方にはユニークなビジネスアイデアがある。起業を支援する人が増えれば地方の可能性はもっと広がるだろう」とコメントした。

四国若者会議代表理事の瑞田信仁さんは東京会場の明治大からテレビ会議システムで参加。将来徳島移住を考えている参加者がいることを報告し「自分の幸せの物差しを持って働いている人は格好いい。そんな人々とつながりを深めれば大きな力になる」と述べた。

コーディネーターの田口太郎徳島大准教授は「自分の思い描く暮らしを実現するには、少しぐらいの困難を楽しむ心意気がほしい。そうすれば後悔しない起業につながるのではないか」とまとめた。

会場には地域づくりに関心を持つ人たちが集まった。三好市に移住し、スポーツを通じた地域活性化に取り組む久保匡史さん(34)は「田舎の可能性をあらためて感じた。面白い地域になるよう、皆で知恵を出したい」と話した。（梅田正人）

地域でスモールビジネスを起こす魅力などについて意見を出し合ったフォーラム＝三好市井川町の徳島大にしあわ学舎

平成27年7月6日［徳島新聞］

黒い線のコースをつくり、ロボットを走らせる児童＝美馬市脇町のマルナカ脇町店

ロボット作りに歓声

美馬 親子連れ 科学を体験

児童に科学の面白さを知ってもらう「みま科学体験ミニフェスタ」（美馬青年会議所主催）が美馬市脇町のマルナカ脇町店で開かれ、約60人の親子連れでにぎわった。

「ロボット教室」では、徳島大地域創生センターの浮田浩行講師の指導を受け、紙の上に引かれた黒い線をセンサーが探知して自走する機械を作った。

参加者は持参したパソコンに組み込んだプログラムのソフトを使って機械を操縦したり、音を鳴らしたりした。

このほか液体窒素やドライアイスの性質について理解を深めるコーナーもあった。

父親と参加した原田裕三君(8)＝岩倉小3年＝は「ロボット作りは楽しかった。音を鳴らすプログラムがきちんと動いてうれしかった」と笑顔だった。（岡島久夫）

平成27年7月29日［徳島新聞］

ワークショップ始動

空き物件の活用探る

39人参加、美馬で「研究室」

徳島新聞社・徳島大学連携事業

徳島発 幸せ ここに。

まちしごと ファクトリー

徳島新聞社と徳島大の連携プロジェクト・まちしごとファクトリーの実践型ワークショップ「スモールビジネス開発室」が28日、美馬市の脇町劇場オデオン座で始まった。県内外から地域活性化や起業に関心を持つ39人が参加。地域で仕事をつくりだすアイデアなどについて意見を交わした。

開発室は座学形式の研究室（3回）と、ビジネスプランを具体的に組み立てる合宿（3回）からなり、この日は「まちしごとを考える」をテーマに研究室の初回が開かれた。

兵庫県篠山市で古民家再生や店の誘致活動などに取り組んできた吉成佳泰さん(35)をゲストに迎え、脇町のうだつの町並みでカフェ兼産直店「フナトト」を営む田村圭介さん(38)が進行役を務めた。

参加者は4グループに分かれ、実在する空き物件情報をもとに、どう活用できるかの計画づくりに挑戦。各グループから「藍染の体験施設」「川遊びの拠点」「カフェ」「1日1組限定の宿泊施設」「観光案内所」など多彩なアイデアが発表された。

吉成さんは篠山での経験を踏まえながら「古民家を貸してもらえる流れをつくり、店が増え、客が集まり、商売が成り立つ。この流れが続くと町の力量もついてくる」と起業へのチャレンジにエールを送った。

開発室は今後、9月25日の研究室、11月14・15日の合宿（いずれも参加者募集中）へと続き、起業を考える地域の担い手づくりを目指す。（門田誠）＝9月5日付朝刊に特集面

スモールビジネスを考えるワークショップで意見を出し合う参加者＝美馬市の脇町劇場オデオン座

平成27年8月29日［徳島新聞］

徳大発 地域創生

フューチャーセンター開所

商品開発や人材育成推進

徳島大が「地域創生」の拠点と位置付ける同大フューチャーセンターが24日、常三島キャンパスにオープンした。人口減少や少子高齢化といった課題解決に向け、多様な人たちが地域活性化や商品開発、人材育成に取り組む。同日開館した「地域創生・国際交流会館」に設けられた。

会館で記念式典があり、山口俊一沖縄北方兼科学技術担当相や飯泉嘉門知事ら100人余りが出席。香川征学長が「多くの人に利用してもらい、地域に根差した大学としてますます発展していきたい」とあいさつした。

同大地域創生センター長の吉田敦也教授がセンターの概要について「未来をつくる行動の場。新しい概念の下で挑戦していく」と説明した。

センターには、議論の場となるフリースペースのほか、商品開発などに使えるキッチンなどを備え、教員1人が常駐する。従来の手法では解決できない地方の社会的課題に対応するため、さまざまな関係者が集まってアイデアを出し合う。

活動の第1弾として徳島市のまちづくりを考える。高校生と連携して商品づくりにも取り組む。

会館は鉄筋コンクリート6階建てで、延べ約3445平方㍍。5階にセンターが入るほか、留学生支援の相談窓口や語学学習スペースを設けた。（坂田佑耶）

地域創生・国際交流会館にオープンしたフューチャーセンターを見学する山口氏㊨ら＝徳島大常三島キャンパス

平成27年9月24日［徳島新聞］

あわっ子文化大使の中学生㊨の案内で四国霊場を巡る明大講座生＝徳島市国府町の井戸寺

明大講座生 遍路を体験

県・徳大ツアー 地元中学生が解説

県と徳島大は15～17日、包括連携協定を結ぶ明治大の生涯学習講座リバティアカデミーの講座生を対象にした遍路のフィールドワークツアーを開いた。50～70代の講座生12人が、バスで四国霊場20番札所・鶴林寺（勝浦町）や23番・薬王寺（美波町）など札所7カ所を巡った。

17番・井戸寺（徳島市国府町）では「あわっ子文化大使」の中学生5人がガイド役となり、弘法大師の伝説を紹介。大師が水不足に悩む民のためにつえで掘ると、一夜にして清水が湧き出たとされる井戸などを見学した。

重田江利子さん(51)＝東京都東村山市、銀行員＝は「遍路は有名だし、四国を一度訪れたいと思っていた。深い歴史を感じた」と話した。

包括協定は2013年に締結され、ツアーは14年度に始まった。（土井良典）

平成27年11月18日［徳島新聞］

人形浄瑠璃 データ化

木偶の構造や遣い手の動き計測

徳大 伝統継承に一役

徳島大地域創生センターは、阿波人形浄瑠璃の木偶の構造や人形遣いの動きをデジタルデータとして保存する「阿波人形浄瑠璃共創プロジェクト」を始めた。集積したデータを基に3Dプリンターで木偶を製作するほか、より人間らしく見える木偶の操り方を探求。

3Dスキャナーを使って木偶の形や色を計測する浮田講師＝徳島大常三島キャンパス

最先端技術を使って徳島の伝統文化継承に一役買う。

プロジェクトは同大学院ソシオテクノサイエンス研究部の浮田浩行講師（画像処理）らが進め、11月上旬から木偶を詳細に計測している。本体とからくりの形を3Dスキャナーで読み取り、データ化して半永久的に残す。

データを活用して3Dプリンターで木偶を製作するワークショップを計画しており、からくりの仕組みや人形浄瑠璃の歴史を学べるようにする。

人形遣いの名人の動きはモーションセンサーで計測、分析する。初心者でも人形を生き生きと操れるよう、要点を分かりやすく伝えるトレーニングシステムの開発を目指す。

浮田講師は「将来的には3Dプリンターで作った木偶を使い、キャンパス内で公演したい」と話している。（吉松美和子）

平成27年12月3日［徳島新聞］

キャンパス彩る光の芸術

徳大 学生考案 LED作品点灯

人に反応してLEDの色が変わる作品＝徳島大常三島キャンパス（秋月悠撮影）

徳島市の徳島大常三島キャンパスで11日夜、学生らのLED作品を飾るイルミネーションイベントがあり、冬のキャンパスを鮮やかに彩った。一部の作品は、来年1月19日まで点灯する。

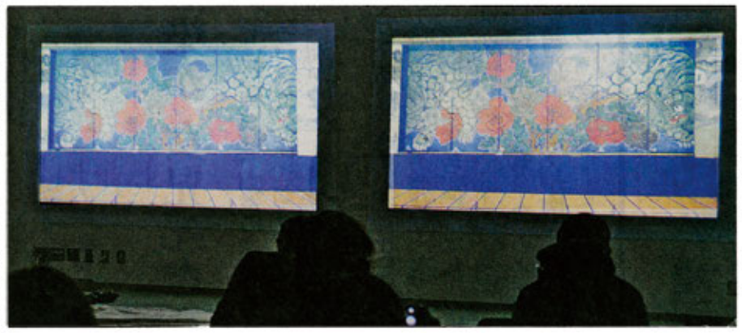
総合科学部の学生ら約40人が4万個のLEDを使って8作品を作った。渦潮をイメージした「ウズ」や、脈拍の早さをセンサーが感知して光り方が変化する「告白」などがあり、学生らは青やピンクなどに輝く作品に見入っていた。

点灯期間中はキャンパスを一般に開放し、大学開放実践センターの駐車場を利用できるようにする。家族と一緒に来ていた鳴門教育大付属小1年の杉本賢音君(6)は「いろんな色に変わって、とてもきれい」と喜んでいた。（吉松美和子）

平成27年12月12日［徳島新聞］

襖からくり４Kで堪能

徳島大で上映会



襖からくりの4K映像が紹介された上映会＝徳島大常三島キャンパス

徳島県内の農村舞台「襖からくり」を収めた4Kで人形浄瑠璃とともに映像の上映会が18日、上演されてきた「襖（ふすま）」の徳島市の徳島大常三島キャンパスであった。

神山町の映像制作会社「えんがわ」の4K作品は、同町神領の農村舞台「小野さくら野舞台」に残る襖からくりなどを紹介。勇壮なワシや桜の絵が次々と映し出され、約50人の観客は最先端技術で見る伝統芸能の美しさを堪能した。とくしま座による「傾城阿波の鳴門 順礼歌の段」の上演もあった。

徳島市国府町和田の主婦竹中陽子さん(58)は「初めて襖からくりを見た。色鮮やかで感動した」と話していた。

上映会は、徳島大地域創生センターとえんがわ、徳島市の阿波十郎兵衛屋敷が進める「阿波人形浄瑠璃共創プロジェクト」の一環で、人形浄瑠璃の活性化を目指している。（吉松美和子）

平成27年12月19日［徳島新聞］

地域防災 意見を交換

徳大にしあわ学舎 つるぎで初講座

「防災と地域づくり」をテーマにした講座（徳島大にしあわ学舎主催）が30日、つるぎ町半田の日浦地域集会所であった。県西部の自主防災組織関係者ら約40人が、それぞれの活動や地域の課題について情報を交換するなどした。

防災意識の向上について意見を出し合う参加者＝つるぎ町半田日浦

参加者は4グループに分かれ、住民の防災意識向上や自主防災会の連合会結成などについて話し合った。「そもそも住民同士が顔を合わせる機会が少ないことが問題だ」「意識向上に向け、まずは地域の催しへの参加を促すことが大事」などの意見が出ていた。

池田第3地区住民福祉協議会の木曽松子さん(79)は「今回を機に他自治体の防災組織とつながりを深め、活動を充実させたい」と話した。

講座は徳島大にしあわ学舎が地域の人材養成を目的に初めて開いた。2月は地場食材、3月は廃校利用をテーマに開く。

（岡島久夫）

平成28年1月31日［徳島新聞］

ドローン活用例紹介

飛行実演で宙を舞うドローン＝三好市井川町の辻小学校

三好 徳島大がセミナー

小型無人機ドローンなど無人航空機（UAV）についての普及啓発セミナーが31日、三好市井川町辻の徳島大学にしあわ学舎で開かれ、住民ら約30人が地域での活用の可能性を探った。

徳島大大学院ソシオテクノサイエンス研究部の三輪昌史准教授が、ドローンの仕組みや活用例を紹介。「田畑での農薬散布や害獣駆除、災害現場の調査など、さまざまな分野で応用できる可能性がある」と強調した。一方、墜落や危険操縦の事例についても映像で示しながら「安全への配慮と十分な訓練が不可欠」と指摘した。

近くの辻小学校校庭や体育館では飛行実演も行われた。

ドローンの操縦を体験した那賀町沢谷の林業亀井裕人さん(38)は「植林用の苗木や害獣よけの資材運搬など仕事に活用してみたい」と話した。（佐藤陽香）

平成28年2月1日［徳島新聞］

文部科学省
COC＋事業に関する
報道

徳島発 幸せ ここに

徳島新聞社・徳島大学連携事業

まちしごとファクトリー

模擬店で反応確かめる

スモールビジネス開発室 三好で最終合宿

徳島新聞社と徳島大の連携プロジェクト・まちしごとファクトリーの実践型ワークショップ「スモールビジネス開発室」の第3会合が18・19日、三好市池田町の総住交流施設「hee o eamp（ヘキキャンプ）」を舞台に開かれた。参加者が起業アイデアを磨く具体的な事業プランを練り上げてきた合宿もいよいよ最終回。最後は「模擬店出店」を実践し、プランの実現へ向けて最後の調整に取り組んだ。（編集委員＝門田純、徳田仁人）

参加者の合宿参加者9人のうち、自然の調整がつかなかった2人を除く7人が参加。「ヘキキャンプ」に集まった参加者は、ランチオーナーの内藤雅人さん（30）がコーディネーターを務めた。

初日（26日）は、参加者が練り上げてきた事業プランを最終チェック。事業計画の資金計画、今後のスケジュールなどを個別に確認し、コーディネーターらのアドバイスを受けた。

最終日の28日は、今回の合宿のメインプログラムともいえる模擬店に挑戦。ハンドエステやDIY（ドゥ・イット・ユアセルフ）相談、キッチンカーによるカレー販売など、個々の事業プランに合う模擬店を出店した。

会場は「うだつのまるしま」（三好市池田町の旧田町役場）。参加者は前日から仕込みなどの出店準備に余念がない。

「お客さまの反応を今後に生かしたい」。ビューティーサロンの開業を目指し、ハンドエステを模擬出店する河野佑香さん（28）＝吉野川市鴨島町西麻植＝はアンケート作りなどを急いだ。

当日のマルシェ会場は雨が降り続くあいにくの空模様だったが、参加者は客の呼びかけや商品の説明に懸命に取り組んだ。声が訪れるとじっくり話し込んで商品を働きかけ、今後の事業展開に思いを巡らせた。

練り上げたプラン 仕上げ

イベントに向けて、模擬店を盛り上げる工夫を考える参加者たち＝三好市池田町

事業化第1号 キッチンカー導入 中川さん（広告会社員）

野菜の魅力を伝えるために

会社の社員たちと一緒に、野菜の販売ブースを構える方々をキッチンカーで回り、広告会社はこの日の模擬出店で、農産物販売世界一を目指す「ベジハッピークラブ」を結成、珍しい野菜、ジュースなどを販売した。

中川さんは、「ベジハッピークラブ」の結成に当たり、広告会社の持つデザインの力でロゴやパッケージを作り、野菜の魅力アップに力を注いでいる。

グルメな人が集う優美な雰囲気のキッチンカーを出店したのは、農産物販売世界一を目指す「ベジハッピークラブ」の結成に当たり、広告会社の持つデザインの力でロゴやパッケージを作り、野菜の魅力アップに力を注いでいる。

グルメな人が集う優美な雰囲気のキッチンカーを出店したのは、農産物販売世界一を目指す「ベジハッピークラブ」の結成に当たり、広告会社の持つデザインの力でロゴやパッケージを作り、野菜の魅力アップに力を注いでいる。

野菜の魅力を伝えようと事業化されたキッチンカー。模擬出店でカレーを販売し、人気を集めた

食品の地域産業に野菜を販売する中川さん

計画に欠かせぬ「根拠」

徳島大学院生の合宿体験記

阿部 真微さん（23）
都市デザイン専攻
徳島市南末広町

今回のまちしごとファクトリーの第3次合宿を経て、2日間の出店準備を経て、ろだつのマルシェで模擬出店が行われた。

出店準備をする際に興味深かったのは、これまでの事業計画の見直しをしながら、「根拠」は何かという議論がたびたび行われたことだ。どうすれば人に頼まってもらうことができ、お金を使ってもらうことができるか。その「動機」を示すことが重要であるということだろう。

私は昨、ある広告の設計コンペティションに携わった際「人に頼まってもらうためにどんな根拠があってこのデザインにしたのか」と聞かれ、はっとした経験がある。

さらに印象的だったのは合宿参加者の「自分はこうしたい」という提案に対し、コーディネーターの内村圭介さんが客の目線から「本当にそれが求められているものか」と意見していたこと。「根拠」に説得力を持たせるためには自分の立場だけではなく、一歩下がった視点から物事を俯瞰的に捉えるということが大切なのではないかと私は感じた。

模擬出店を終えて、それぞれの参加者は想像通りうまくいったこともあるだろうし、逆に思い通りにいかなかったこともあるだろう。それらの経験をもとに、あらためて「根拠」を持った計画を練り、「まちしごと」を作り出していってもらいたいと思う。

【新田編集】近藤伸一

オープニングファンクション

第1回合宿

第2回合宿

第3回合宿

7ヵ月間の成果を披露

来月5日 美馬で発表会

スモールビジネス開発室の参加者による成果発表会が3月5日、美馬市の脇町駅前オアゾ脇で開かれる。産学官などによる約「研究室」と「7日間」にわたる「合宿」を通じ、参加者が練り上げた事業プランを披露する。

3日目の研究室では、徳島大の研究員、企業の専門家、行政関係者などが取り組みを講評する。

「まちしごとファクトリー」は、徳島新聞社と徳島大の連携事業として、2014年度スタート。

「町」に密着した「仕事」を創出し、地域の魅力向上を目指す。この秋、を込め、「まちしごと」という概念を掲げた。それを生み出すファクトリー（工場）としての役割を果たすプロジェクトで、県内産業を担う人材育成、スモールビジネス開発室、ビジネスプランコンテストなどを始めた。

発表会の参加者募集

成果発表会は午後から。参加者は、徳島大学による学生のポーズ。http://www.tokushima-u.ac.jp/cfc/7kagetsu/4 TEL:088(656)7500(内線)2400。問い合わせは、「とくしま市（088(626)2400）」。

吉成さん（東山市長）ゲスト

古民家再生に取り組む

平成28年2月27日［徳島新聞］

県内就職率向上へ連携

産官学35団体が協議会

学生の県内就職定着へ連携協定

県と徳島大など

徳島県内の大学や県、経済団体などは9日、若者の県内就職率向上を目指す「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を発足させた。

協議会には35団体が参加し、2014年度に44・7％だった学生の県内就職率を、19年度までに10％引き上げることを目指すとした。

目標達成に向け、学生が参加しやすいインターンシップの方法を大学と企業などが共同で開発する。大学では郷土の歴史や文化に関する授業や、卒業生を交えた就職支援授業を行い、地元で働く魅力を伝えていく。

9日、徳島市の徳島グランヴィリオホテルで初会合があり、関係者約70人が出席。会長に徳島大の香川征学長を選出し、事業概要などを説明した。

人材育成事業は、文科省の地（知）の拠点大学による地方創生推進事業の一つとして徳島大が採択を受けた。

（吉松美和子）

学生の県内就職定着へ連携協定

県と徳島大など

徳島大や阿南高専など県内の高等教育機関と県は15日、若者の県内定着に関する連携協定を結んだ。県内の企業や経済団体とも連携し、学生たちの地元就職率の向上を目指す。

若者の県外流出を抑え、地方の活性化を図ろうと徳島大が呼び掛けた。2014年度に44・7％だった学生の県内就職率を、19年度までに10％引き上げる目標を設定。具体的事業として、企業の協力を得て1カ月程度のインターンシップを行うほか、県内で就職した卒業生を交えて合同授業を行い、徳島で働く魅力を伝えてもらう。

県庁で調印式があり、徳島大、四国大、徳島文理大、徳島工業短期大、阿南高専の代表者と飯泉嘉門知事が協定書を交わした。

（川辺健太）

平成27年12月16日［徳島新聞］

平成28年2月10日［徳島新聞］